平成３０年度　第１回　桐生市総合教育会議　議事録

１．日　時　　平成３０年１２月１０日（月）　午後３時３０分～４時４８分

２．場　所　　桐生市役所　３階　特別会議室

３．出席者

【構成員】　桐生市長　　亀山　豊文

桐生市教育委員会

教育長　　柴﨑　隆夫

教育長職務代理者　板橋　英之

委員　　大澤　美智子

委員　　新居　理恵

委員　　髙山　信廣

【事務局】　（市長部局）

総合政策部長　　和佐田　直樹

企画課長　　田島　規宏

企画担当係長　　金子　英雄

企画課付技師　　坂主　樹哉

（教育委員会事務局）

管理部長　　戸部　裕幸

教育部長　　端井　和弘

総務課長　　原橋　貴史

生涯学習課長　　藤川　恵子

スポーツ体育課長　新井　敏彦

学校教育課長　　前原　通宏

総務課庶務係長　　石橋　政幸

【傍聴者】　１人

【報道機関】１社

４．議　題

（１）今後の重点的に講ずべき施策等について

５．議事の大要

（開始：午後３時３０分）

○開会　〈司会：企画課長〉

○あいさつ

桐生市長　亀山　豊文

首長と教育委員会で構成する総合教育会議は、平成２７年４月の法改正により、すべての地方自治体に設置された。桐生市においても、平成２７年７月に桐生市総合教育会議を設置して以来、何度となく会議を開催しているが、今後の教育に関する様々な課題等についてしっかりと議論していく必要があると思っている。

現在、次期総合計画策定の準備を進めており、その中で市民アンケートを実施したが、子供たちが重伝建や大川美術館といった桐生の魅力をあまり知らないという結果が出た。桐生を好きな子どもを育てる中では、桐生が持つ素晴らしさを子供に教える機会を設ける必要が有ると感じていて、今後の教育を進めていく中では重要になってくると思っている。桐生に愛着を持って、途中で大学進学や色々な形で桐生を離れたとしても、また戻って来られるような、そんな教育環境づくりをしたい。

今日は、新しく柴﨑教育長になってからの初めての会議でもあり、髙山委員においても初めての総合教育会議であるが、ぜひ忌憚のない意見をいただきながら、より良い教育行政が実行できるよう力を貸してほしい。

○協議・調整事項　〈議長：亀山市長〉

（１）今後の重点的に講ずべき施策等について

発 言 者	発　言　内　容
事務局	（資料「桐生市教育大綱に関わる平成 31 年度主要事業」について説明。）
亀山市長	事務局より説明があったが、今後の教育行政について重点的に講ずべき施策や課題等、意見があれば教育委員の皆様から遠慮なく発言をお願いしたい。
板橋委員	「サイエンスドクター事業」については、桐生市の特色ある教育ということで市民にも浸透してきたと思う。特に今年は、全幼稚園でロボットを使ったプログラミング教育も開始した。これは画期的なことだと思う。これを小学校にも広げていくと、幼・小・中と一貫した取り組みになって、より一層桐生市の特色ある教育になって輝くと思うが、いかがか。
端井教育部長	小学校のプログラミング教育については、平成 32 年度から新学習指導要領に入るため、来年度はプログラミング教育を教科の中でどのように取り入れれば有効なのか研究していく。それをはっきりさせた上で、サイエ

発 言 者	発　言　内　容
	ンスドクターや群馬大学の教員に協力いただきながら、教育効果が上がる授業の推進をしていきたい。 　まず、平成 31 年度はどんな授業ができるのか研究を進めていきたい。
亀山市長	総合教育会議は平成 27 年から設置されたが、その前に私が市長に就任してから「産学官懇談会」も始めた。その中で、板橋先生から非常にありがたい提案をいただき、サイエンスドクター事業を開始できて、それから 6 年経つ。早いうちから色々と挑戦する仕組みがしっかりと築かれることによって、板橋先生が言ったように、幼・小・中が一体となって、スーパーサイエンスハイスクールなどの高校の取組にも繋がっていくと思うので、これをもっと充実させていきたい。
板橋委員	今、幼稚園ではロボットを使っているが、例えばロボットを桐生市で購入していただき、それを各小学校にて持ち回りで使うことができると思う。ロボットの使い方は一度サイエンスドクターの授業を見てもらえれば、小学校の先生も出来ると思う。そうすることで、幼稚園での取組を少しレベルアップさせて小学校で、それを更にレベルアップしたものを中学校で実施できると、繋がっていくと思う。 　ぜひ予算付けしてもらえるとありがたい。
亀山市長	現在は幼稚園の全園で実施していたか。
端井教育部長	全７園で１回ずつ、そして幼稚園の保護者も集まってもらい市民文化会館で１回行い、今年は全８回実施した。保護者からも好評だった。
新居委員	相生幼稚園でプログラミング教室を見学させていただいた。市民文化会館で実施したものについては、おそらく子供よりも親の方が興味を持って足を運ばれた方が多いと思うが、各園での実施については、親の興味がなくても、子供全員がそこで一度体験ができて、子供の興味発掘になると感じたので、全園で実施したのはすごく良かったと思う。 　板橋先生が小学校でもと仰っていただいたのは、小学校で間が空いてしまって、中学校でまたやると繋がりが無くなって、もったいないと私も思ったので、ぜひ小学校でも実施して繋げていただければありがたい。
端井教育部長	積極的に考えていきたい。
柴﨑教育長	今の教育大綱に「地域の教育資源を活かす」とあるが、これは桐生にしかできない、桐生ならではの教育ということだと思う。群馬大学が地元にあり、この教育資源を活かさないのはもったいないと思い、教育委員会内に連携推進室を作って担当を置いたので、サイエンスドクター事業もさらに充実させて、これに限らず群馬大学との連携など桐生ならではの桐生にしかできないような事業をどんどん進めていくのが重要だと思う。 　ただし、それには予算的なものも必要となってくる。学生にも無料で来ていただくわけにもいかないので、教育委員会で考えていきたいと思う。

発 言 者	発　言　内　容
亀山市長	はっきりと効果が出るものなので、分かりやすい予算付けだと思う。 前回の総合教育会議のときに、色々な教育の取組についてＰＲが足りないという話があったので、今年から広報きりゅうに桐生市の教育について連載している。 新居委員の話にあったように、親が方向付けして子供を育てる部分と、子供が積極的に自身で考えながら手を挙げていくという、そんなシステムも、桐生市はこんなことをやっているということが皆に分かりやすく伝わることが一番だと思う。良い事をやっているのだから、それをもっとＰＲしていきたい。
柴﨑教育長	市長の挨拶にあったように、桐生を好きになって桐生で将来生活していくような子供、途中で学生の時などは外に出ても良いが、後で桐生に戻ってくるような子供たちを育てたい。色んな力をつけて伸ばせるような教育をして、将来的には桐生で生活してもらうという、そこのところを我々が磨ければいいと思う。それには、桐生を好きになってもらわないと困るわけで、他の方が良いと言って出て行かれると困る。
亀山市長	地元の小学校の先生方と会う機会があるが、もっと先生自体に桐生を知ってもらうことも必要だと思う。桐生に赴任してくるわけなので、桐生のことについて勉強できる場づくりをした方が良い気がする。 ここで、挨拶で触れた市民アンケートの結果を総合政策部長に少し披露していただく。意外な結果だった。
和佐田総合政策部長	平成 32 年度を初年度とする次期の総合計画の策定にあたり、アンケートを実施した。対象者は桐生市在住の 18 歳以上の方、それから桐生市の中学校に通う中学 2 年生、また、インターネットを通じて近隣 8 市の住民も対象とした。まだ集計を終えたばかりで、本日資料は用意していないが、その中で特徴的なものを紹介する。 このアンケートの趣旨は、市民が日々の生活の中で感じていることや、地域について実感できることなどを伺うものになっている。 中学生の対象者は全中学生 950 人で、回収が 897 票あった。設問はいくつかあるが、その中で端的なものは、市のさまざまな施設やイベント等の魅力が市民に十分浸透しているかという視点に立った質問。桐生市の施設、各特産品、イベント等の魅力をどのくらい認知しているかという質問で、施設、イベント、特産品をそれぞれ 14 項目挙げた。それについて「魅力を感じている」、「知っているが魅力を感じない」、「知らない」の 3 択で選んでいただいた。 14 の項目というのが、「桐生が岡遊園地・動物園」、「大川美術館」、「ぐんま昆虫の森」、「わたらせ渓谷鉄道」、「カリビアンビーチ」、「重要伝統的建造物群保存地区の街並み」、「ノコギリ屋根織物工場」、「桐生織物」、「桐

発 言 者	発　言　内　容
	生のグルメ」、「カッコソウ」、「桐生の自然」、「桐生八木節まつり」、「堀マラソン大会」、「桐生ファッションウイーク」、こういった 14 項目について 3 択をした。 　中学生の結果については、概ね一般市民よりも肯定的な結果にはなり、ほとんどの項目が「魅力を感じている」の割合が多かったが、その中で 2 点「知っているが魅力を感じない」の割合が多かったものがある。一つは「大川美術館」で、「魅力を感じている」が 30%、「知っているが魅力を感じない」は 47.2%という結果になった。「知らない」は 22.4%だった。もう一つは「堀マラソン大会」で、「魅力を感じている」が 30.4%、「知っているが魅力を感じない」は 63%、「知らない」は 5.9%。 　それから、注目すべきなのは、「知らない」の割合が最も高かった項目が 3 つある。一つは「重伝建の街並み」で、中学 2 年生の 60.9%の方が「知らない」という結果。 　「カッコソウ」については 37.1%が「知らない」と答えた。「カッコソウ」については、一般市民でも唯一「知らない」が最も多かった項目でもある。 　「桐生ファッションウイーク」については、75.5%が「知らない」だった。「ファッションウイーク」については、私の印象では個々のイベントは知っているものもあると思うが、括った「ファッションウイーク」という言葉となると知らないのだと思う。また、若者向けのイベントが少ないことも影響していると思う。 　重伝建については、限定する地区のこととはいえ、あまりにも認知度が低いということが気になっている。 　詳しくはまだ分析できていないが、このような結果が出たということを紹介させていただいた。
亀山市長	何故知らないのかを、学校で追いかけて調査しても良い気がする。
端井教育部長	残念な結果。 　重伝建については、新採用教員と市外から来た教員については研修会で、一日や午後半日を使って有鄰館から天満宮まで歩きながら説明を聞く機会を設けているが、それが生きていないということになるので、これからまた考える必要がある。 　大川美術館については今年度、美術の教員の会議を 3 学期に大川美術館で開催するので、終わった後に少し大川美術館の素晴らしさなどを専門の教員に見てもらい、それぞれの小中学校で活用してもらえるような研究も始めようと思う。
亀山市長	大川美術館はレベルが高いので、子供にとっては難しいかもしれない。美術館を利用した美術の教育、例えば美術館で美術のお話をしてもらうこ

発 言 者	発　言　内　容
	とができたら良いと思う。それを通じて美術館に足を運ぶ習慣をつけるようなことも良いと思う。
端井教育部長	５年生全員に美術館の案内を配っていて、それをきっかけに足を運んでもらおうと狙っていたが、それだけで満足してしまっていた部分もあるかもしれない。芸術面を伸ばすことも大切だと思うので、少し研究して考えていきたい。
柴﨑教育長	多くの子供が知らない項目がこれだけあるのは問題。「桐生を好きな子供」を育てている教育委員会としては、ショックな結果。 ただ、重伝建やファッションウイークは具体的なものが無い。例えば、カッコソウと言われればストレートに花だと分かるが、重伝建と言われてもだいたいこの辺りとか、ファッションウイークも個別のイベントは参加していたり知っていたりしても、全部を総称してのファッションウイークを知っているかというと、分からないのではと思う。ただ、それにしても知らなさ過ぎると思う。 教育委員会としては、今後「桐生を好きな子供」を育てる上では非常に大事な数字になってくると思う。やはり、子供が知らないということは、教員も知らないということだと思う。
大澤委員	ファッションウイークは一店一作家などの販売や展示が多く、大人は行く。重伝建は、市長を筆頭に力を入れてやっと指定されてきた割には、子供たちは確かに知らない。子供が自ら天神町の方まで行くことは、たぶんあまり無いので、あえて連れて行かないと行く機会が無いのだと思う。 社会科見学のコースには入っていないのか。
前原学校教育課長	有鄰館等も含めた重伝建エリアで校外学習をしている学校は多く、小学校の半数くらいは重伝建エリアに行っている。特に、「織物参考館・紫」を含めて行っているところが多い。しかし、「重伝建」という言葉自体にはあまり触れていないのだと思うので、今後どうやって子供たちに話をするのかが大事だと思う。
大澤委員	「織物参考館・紫」は昔からどこの学校も行っている。県外からもおそらく来ている。何故かと言うと、体験学習ができるから。重伝建エリアにはそういう体験をできる場所がたぶん無い。
前原学校教育課長	天満宮から有鄰館まで歩いて行き、有鄰館で色々な話を聞くというのがよく行われている内容。
大澤委員	全学校が行って、説明を受けられると良いかもしれない。
新居委員	子供たちはたぶん有鄰館は知っている。しかしそれが重伝建という言葉とは結び付かなくて、重伝建は知らないのだと思う。
前原学校教育課長	地域学習は３年生が中心に行っているので、重伝建という言葉が子供たちの中に残りにくいのだと思う。継続的に伝える必要があると思う。

発 言 者	発　言　内　容
髙山委員	３年生で桐生の学習をするということだが、３年生で桐生を知ろうという副教材みたいなものはあるのか。
前原学校教育課長	３～４年生で扱う副読本がある。
髙山委員	そうすると、教室の中でも扱っているのだから、それが定着しているかどうかという話になる。
前原学校教育課長	有鄰館や天満宮はよく分かっていると思うが、重伝建地区という形になると、子供たちに伝えきれていないのだと思う。
亀山市長	大人はどれくらい知っていたのか。
和佐田総合政策部長	一般市民では「知らない」は 26.4%に減るので、7 割以上は知っていることになる。一般市民で「魅力を感じている」方は 28.2%、「魅力を感じていない」が 38.3%。
亀山市長	桐生を知ってもらうことはこれからの課題。
端井教育部長	桐生に対して、どういう風に思っているのか、知識、郷土愛を確認する必要があると思うので、検討していく。
亀山市長	織物の歴史は「紫」などに行って実体験を交えて学んでいるのか。
前原学校教育課長	３年生を中心に織物体験学習を行っている。色々な話を聞いた後に、例えば「紫」に行って、さらに歴史的なことや伝統を学んでもらうという学習を行っている。
大澤委員	桐生から出て行って、また戻ってくるということが市長の挨拶にあったが、やはり心の拠り所があるのだと思う。天満宮だとか紫だとか、実際に自分の事として体験したところは、大きくなってからもまた何回も行こうという気持ちになると思う。例えば昆虫の森や自然観察の森は、虫や植物が好きな子供は何回も行く。そういう、ただ見るだけで終わりではなくて体験をしてくると、あの時は面白かったとか、あの時綺麗なものを見たとか、理工学部もそうだが、あの大学はあんなことが凄かったとか、それがやがてまた繋がっていくということがある気がするので、「桐生が好きな子供」を育てるにはそういう体験ができるようなことも考える必要があると思う。今、市外から来た人達によって重伝建地区に工房もできてきているので、そういったところも利用させてもらえると良いと思う。 カッコソウについては、卒業式の時には祝辞で必ずカッコソウの話をしている。６年生や中学３年生はその時に初めてカッコソウが桐生の花だと知るのかもしれないが、カッコソウという言葉が頭の中に入れば良い。
亀山市長	卒業式の教育委員会からのメッセージにも入っているのか。
端井教育部長	黒保根と新里、旧桐生地区で多少自然の名前を変えてはいるが、伝えたいメインの話は変えないよう工夫してメッセージを送っている。
亀山市長	そういう意味では６年生から中学生での認知度は高いということか。

発 言 者	発　言　内　容
	他には何かあるか。
大澤委員	中学生の海外研修派遣について、応援団の一員として感謝している。広報きりゅう１１月号にも詳しく書いていただいたし、関心を持って見守っているところだが、中学生が各学校から１名ずつ参加してホームステイをさせてもらったり、海外の学校の生徒と交流したりということで、本当に凄い体験をしてきたのだと思う。 今後もぜひ続けていただければと思っているが、英語も小学校からの必修教科になるので、小学生にとっても、中学生になるとアメリカのコロンバス市に行けると思ってもらえて繋がるかもしれないので、今後の見通しをお伺いしたい。
亀山市長	中学生の海外派遣は継続していきたい。帰ってきた子供たちに話を聞くと、本当に良かったと言ってくれたし、日数が短かったとも言われた。一回目だからということもあるが、コロンバス市側の受け入れ態勢も考慮して、期間が伸ばせるか検討していきたい。 全体的な報告を学校教育課長からお願いしたい。
前原学校教育課長	海外研修ということで、今年度初めてコロンバス市に行かせていただき、多くの関係者と現地の方の協力によって無事実施できた。 成果については、派遣された生徒は、日本との違いや日本の良さ、桐生の良さについて再発見したことを話してくれた生徒が多かった。英会話については、技術はもちろんだが、伝える気持ちやコミュニケーションを取ろうという積極性が一番大事だと話していた。今後については、単語を知らないと会話ができないので単語をたくさん憶えたいとか、これからどんな勉強をしていきたいのかを話してくれた生徒が多かった。 また、各学校で全校生徒の前でそれぞれ報告会を行い、聞いた生徒の中にはかなり刺激を受けて、たくさん勉強をして来年は自分が海外研修に行きたいという生徒もいた。 異文化に触れるという貴重な経験ができ、それを色々な生徒に伝えるという取組も、初回でありながらよくできたと思う。 あとは、現地の学校に実際に入っての体験がもっと充実したら良いという生徒の声もいただいたので、検討していきたい。
亀山市長	本当に喜んでもらえたのが良かった。若いときから海外に行って、英語の必要性を感じとって、もっと勉強したいと思うこと自体が良いと思う。大人になってから行って、若いときにやっておけば良かったと後悔することもあるので、現役の生徒の時に英語の必要性を感じれば、もっと単語を勉強するし、こういうきっかけは大事だと思う。
髙山委員	ぜひ人数と日数を増やしていただきたい。
端井教育部長	予算のこともあるが、受け入れ側の態勢の問題もある。アメリカには中

発 言 者	発　言　内　容
	学生の留学が無い。最初は２０人の予定だったが、まずは受入れられても１０人ということになった。今回実施してみて、日程はもう少し伸ばせるかもしれないという話も出てきたので、今後調整をしながら継続したい。 　子供が、行く時と帰ってきた時では全然違って、自信に満ち溢れた顔をしていたので、良いきっかけ作りになったと感じている。そういう子供が１人でも多く増えれば、教育委員会としてもありがたい。
亀山市長	コロンバス州立大学の学生が桐生に毎年来て交流を行っているが、今教育部長が言ったように、アメリカでは中学生くらいの年代の子供は出さないとのこと。送迎も全部スクールバスで行っている。 　そういうこともあって、色々な文書を交わしているときには、先方は後ろ向きな反応だったが、私が呼ばれて実際にアメリカへ行ってみたら前向きに変わっていて、派遣が実現した。 　日程は、アメリカと日本の長期休暇の期間が異なり、調整が難しかった。
端井教育部長	コロンバス州の夏休み中は本当に暑いそうで、現地の方曰く、外に出ている人は誰もいないくらい暑いので、日本の子供に来てもらっても馴染めないと言われた。９～１０月であれば少し涼しくなるということで、その時期になった。 　今回、午前と午後で２つの学校を訪問して交流したが、期間を伸ばせればここがもう少し充実し、一貫校の交流と普通の中学校の交流を増やすと子供はもっと楽しいだろうということを、現地の教育委員会の方に仰っていただいたので、もし調整がつけば今後そういうことも考えていきたい。
柴﨑教育長	こういうものをきっかけにして、各家庭が子供を留学させてみたい、中学生以前に体験をさせてみたいと思ったときに、それならコロンバス市にこういうのがあると紹介ができて、それで現地へ行って１週間でも２週間でも生活をして帰って来られるという道筋ができると良い。市の行事ではなく、希望者が留学したいときに、どんな手続きをしてどこに行って何をしたらいいのか分からないというのがあるので、そういうところまで話が進んでくれると、自費にはなってしまうが、希望者が皆留学できるようになって良いと思う。
板橋委員	少し視点が変わるが、大学にはグローバルフロンティアリーダー（GFL）コースというものがあり、特別な学生だけを集めて特別な教育を行っている。その学生は海外に派遣されて国際会議での発表などを経験するので、そういう学生たちとも繋がりを持てると、何か新しいプログラムを組めるのではないかと思う。具体的に何が良いのかは分からないが、GFL の学生は１学年に２０人くらいいて、非常に積極的な学生ばかりなので可能性はあると思う。
亀山市長	学生の派遣先は大学なのか。

発 言 者	発　言　内　容
板橋委員	大学に行かせたりしている。費用は大学からも出している。ただし、グローバルフロンティアリーダーコースに入るのが難しい。成績上位であることが必須で、誰でも入れるわけではない。 その学生たちは非常に積極的なので、その学生と、留学したい中学生とで交流が持てると面白いと思う。
亀山市長	やはり、誰でも行けるのではなく、努力をした子供が報われるような条件は必要。そういうシステムが無いと、保護者からあの子が行けるのだからうちの子も行かせてと言われてしまったときに困ってしまう。ある程度の基準をクリアして合格しないと行けないようにする必要がある。
端井教育部長	今回の派遣でもホームステイに一人で行くので、ある程度日常会話ができないと、本人が悲しい思いをしてしまうので、英語力や精神状態、あと、選ばれたらその中学校の代表なので、帰ってきた時に体育館で全校生徒の前で報告できるかと聞いたら、喜んでと言ってくれた生徒が多かった。 そういういくつかの条件をクリアした方にお願いしたいと思っている。
新居委員	民間の英会話学校や旅行会社でもホームステイを扱っている。そんな状況の中で、何故教育委員会がやるのかという動機付けは、そことの差別化なのだと思う。そういった意味で、ある一定の条件は必要であり、教育委員会だからこそ出来るホームステイの形もあると思う。 そういうことを今後研究して進めていただきたい。
端井教育部長	教育委員会なので、特定の子供だけではなく、桐生の中学生全員を底上げできるような取組にしなければならないという考えは根底にある。そのためにどうしたら良いのかはこれから研究して進めていきたい。
板橋委員	群馬大学には海外からも教員が来訪していて、一緒に子供も連れて来て１週間くらい滞在する場合が多い。例えば、その子供に中学校に来てもらって、自分の国を紹介してもらったりすると新しい取組になると思う。 現地の休みと日本の休みは期間が違うので、大抵日本では授業をやっている時に来ている。
亀山市長	今年度から教育委員会内に、群馬大学と教育委員会との連携窓口を設置したので、窓口を通じてそういったことも検討していければ良い。今までは、どちらかと言えば産業と結び付いた産学連携が中心だったので、サイエンスドクターや未来創生塾もそうだが、教育との連携に注力したい。
柴﨑教育長	今はサイエンスドクターがメインになっているが、これからどういう連携ができるか、まだ思い付いていない事もたくさんあると思うので、色々な意見を伺いながら、地域の教育力の活用という部分を充実させたい。
亀山市長	太田市のようなアカデミーは無いが、桐生は全部がアカデミーと言えるようになっていければと思う。
板橋委員	桐生には留学生もたくさんいる。

発 言 者	発　言　内　容
亀山市長	留学生がいるというのは凄い。桐生は勉強するために来ているまちだというのは凄いことだと思う。今留学生は何人いるのか。
板橋委員	約１６０人。以前は２００人いたが、東日本大震災の影響で減った。
髙山委員	話が変わるが、先日、清流中学校の１０周年記念行事に呼ばれて伺った。私は統合した時にいたので特に気になったことだが、３つの中学校が統合して５００人くらいの生徒数になったが、今は３００人台に減っていた。 生徒数が減ってくると、教科の担任が揃えられなくなってくる。特に授業時間数の少ない教科は、臨時の方などに来ていただいて授業の形だけは出来るが、授業を通した面白さというのは、授業が終わった後の先生との交流なども必要になってくると思う。国の教員の定数があり、学級数プラスアルファの教員しか配置されないが、基本大綱の２つ目にある「確かな学力を育む」というところを考えていくと、教員を増やしていくことが必要になってくると感じている。
亀山市長	教育現場では、教科担任の現状はどうなっているのか。
端井教育部長	生徒数が少なくなると、学級数に合わせて教員配置数が変わるので、今後さらに生徒数が減っていくと厳しくなると思う。 黒保根、梅田等の小さい学校では、小規模非常勤ということで、技能教科については非常勤講師がその授業時間にだけ教えに来て、教えたら帰っていくという制度があるので、いくつかの学校では取り入れられている。これは県でやっていただいている制度。
亀山市長	私の出身校は菱の学校で人数が本当に少なくて、英語の先生がいないので、美術の先生が英語を教えるような時代だった。そういうこともあって、桐生高校に進学した時に、周りの生徒は英語の発音が良いのに私はカタカナ英語の発音で、私が立って教科書を読んでいると周りが笑い出して、寂しい思いをした。 今後少人数の学校になった時には、本当に課題になる。
端井教育部長	そのような状況に陥らないようにしたいが、もしそうなってしまった時にどうしたら良いのかは考えていかなければならない。
柴﨑教育長	授業自体は非常勤講師を県がつけてくれるが、その方は授業が終われば帰ってしまう。授業の後に、その教科について相談をしたい時には、先生は授業時間内でしか雇っていないので、もういない。そういう部分への対応は、学校の規模が小さくならなければ問題はないが、小さくなってしまった学校では大変な苦労をしているし、子供たちも可哀想な思いをしてしまっている。教員の交流とか、小中学校の交流などを教育委員会として検討していかなければならない。あるいは加配を県にお願いしていく必要もある。子供の指導をするには、人がいなければどうにもならないので、その確保については県に依頼をしている。

発 言 者	発　言　内　容
亀山市長	教員数の確保や足りない教科担任の確保は計画的に行っていった方が良い。県にも一生懸命要望するが、もし足りない時にこういう予算措置が必要だということも、子育て日本一を掲げている市の立場としては、きちんと計画的にやる必要があると思う。財政課に対しても、何年後にはこれくらい必要になるというシミュレーションを作って示していっても悪くないと思う。
端井教育部長	中学校の難しさというのは、小学校とは異なって、私立にどれくらい流れるのかによってかなり変わるので、少し読み難いところもあるが、何％と仮定すればだいたいの動きは予想できるので、相談しながら計画を立てていきたいと思う。
亀山市長	部活も今は大変か。
髙山委員	部活の数があって、子供もいるが、先生が授業だけでいなくなってしまうと、部活を見る教員の数が足りなくなってしまう。部活の数を減らすのは保護者との兼ね合いもあって難しいので、顧問を確保するのをどうしたら良いかという課題になるので、できれば先生にそこまで居てもらえるような形が一番良い。
亀山市長	こういうところに人口減少の影響が出てきている。 まだ時間が残っているが、新居委員からは何かあるか。
新居委員	私からは、放課後子供教室のキッズカレッジについてお聞きしたい。昨年は中央公民館１箇所で実施され、今年は黒保根と東の２箇所で開催していただいているが、すごく良い取組だと思う。地域の人達が地域の子供たちと顔見知りになれて、子供が親抜きで地域の人のことを知っているという関係性ができてくると、本当に地域が安全になっていくことにも発展できるような事業なのではないかと思っている。 今後はどのように進めていくのかということを伺いたい。
藤川生涯学習課長	放課後子供教室については、昨年度は中央公民館１箇所で試行的に実施し、今年度は東小学校区域と黒保根小学校区域の２箇所で実施した。 内容は、毎回様々なプログラムを提供する形になっており、それぞれ全９回実施している。東小学校で５３人、黒保根小学校で１２人の子供が参加している。 来年度以降の取組については、今年はプログラム提供だけを全９回行っているが、そういった形と、あとは子供の居場所作りという意味合いもあるので、もう少し回数を増やすために、特別なプログラムを提供する時と、あとは学習支援や遊びの見守りも取り入れながら回数を増やし、実施箇所数についても徐々に増やしていきたいと考えている。 事業の内容は市が一方的にやるというものでは無く、学校と社会教育係との連携にプラス地域の皆様に参加していただくという形で、文部科学省

発 言 者	発　言　内　容
	でも地域の実情に応じてそれぞれの地域に合った形を生み出すよう言われている。全市で一律に同じ形を広めてやっていくことが難しい事業なので、地域の学校や子供の状況、地域の色々な団体の皆様の状況を考えた上で、それぞれの地域で立ち上げやすい形になるように調整をして、あとは放課後児童クラブとの一体的な実施ということも放課後子ども総合プランでは言われているので、放課後児童クラブの実施者等の意見も聞きながら立ち上げていくことに今後なっていくと思う。なるべく数は増やしたいと考えているので、それぞれの地域での調整を進めさせていただく。
亀山市長	地域の方の協力がある地域というのは活発になっていく。
新居委員	難しいとは思うが、同じ桐生市とはいえども、その地域によって色々な色があるので、最終的には何らかの形で全ての地域で実施できたら良いと思う。やっていることは同じでなくてバラバラでも良いので、地域の人と子供たちが交流する場所・居場所があることがこれからはすごく大切になる。もちろん放課後児童クラブという居場所はあるが、そこで指導している方は必ずしもその地域の方では無い場合が多いと思う。そういうところで子供たちと地域を結び付ける、その子供たちの背後には保護者がいるので、保護者が地域と関わりを持つ機会も無いわけではないが、ＰＴＡなど限られた人だけになってしまうので、そういった関わりを持つための窓口にもなるような色々な可能性を持った事業なのではないかと思うので、コツコツと頑張って続けていただきたい。
大澤委員	私もキッズカレッジが色々な地域に広がれば良いと思ってはいるが、それはおそらく難しいとも思っている。例えば、冬休みが長いので、キッズカレッジのような、あるいは公民館主導で子供たちを見てくれないかと思い、事業の報告を見たが、どれも当てはまらなかった。自分が住んでいる地域でも、なかなか地域のために労をいとわず役を引き受けて貢献していただくのは難しい状況。育成会も無くなり、子供会も既に機能しておらず、婦人会も数が少なくなっており、元気なのはお年寄りだけで、70 代のお年寄りが色々な役を引き受けてやらざるを得ない状況になっている。そのような地域が多いので、そんな状況でキッズカレッジまで引き受けてもらうのは無理だと思う。果たしてこの状況でどうしたら良いのか案が浮かばないが、色々な面から検討していただきたい。
藤川生涯学習課長	地域の方だけにお願いするのは難しいと思うので、ある程度の形をこちらも想定しながら、うまく行くように持って行かなければならないが、新居委員が言うとおり、地域の保護者は比較的年齢も若くて、地域と関わりの有る方と無い方がいるが、そういう方が地域と接する機会になるという視点も確かに有ると思っている。あと、今年までと少し違うのは、地域の中心になって全般的なコーディネートをしてくれる方をうまく見つけて、

発 言 者	発　言　内　容
	教育委員会からも支援をしながらその人を中心に一つの地域を回していけるようにならない限りは、大澤委員さんが言うように地域に丸ごとお願いするというのは無理だと考えているので、コーディネーターの役割などもよく考えながら、市との連携の中で、良いモデルを今後作っていきたい。
亀山市長	明るい家庭作りのモデル地区のようなものをどんどん指定して作っていけば良いのではないかと思う。
柴﨑教育長	私も今それを考えた。地域の子供は地域で育てるというようなフレーズでやっているので。ただ、いきなりは難しいと思うので、まずは公民館を中心として、昨年中央公民館で試行して、今年は希望する２つの公民館で実施した。これは地域の方の力が無ければ絶対にできないことなので、ある程度教育委員会の方で連絡をして計画を作って、徐々に地域の方へ移行していくという方向性で、地道にやっていく必要が有ると思う。いきなり全ての地域でというわけにはいかないので、説得するなり、あるいはノウハウを教えるなりして、色々な手段を使って、地道にやっていくしか無いと思う。
戸部管理部長	全てプログラムを組んでやろうとすると限界があると思うので、先ほど生涯学習課長が申したとおり、例えば校庭で野球やサッカーをやるのを見守るとか、そういうものも含めていかないと、社会教育係の人数も限られている。今、社会教育係の職員が公民館だけではなくてさまざまな業務に絡んでいるので、それが一気に増えると相当な負担になってしまうので、何か上手い方法や他市の好事例があればそれを取り入れていきたい。

○閉会　〈司会：企画課長〉

（終了：午後４時４８分）